The Poems of Kotaro Takamura : An Appreciation of Dotei (The Journey)(7)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飛高, 隆夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3386

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

高村光太郎『道程』を読む（七）

飛高隆夫

牛

牛はのろのろと歩く
牛は野でも山でも道でも川でも
自分の行きたいところへは
まつすぐに行く
牛はただでは飛ばない、ただでは躍らない
がちり、がちりと
牛は砂を掘り土を掘り石をはねとばし
やつぱり牛はのろのろと歩く
牛は急ぐ事をしない
牛は力一ぱいに地面を頼つて行く
自分を載せてゐる自然の力を信じきつて行く
ひと足、ひと足、牛は自分の道を味はつて行く
ふみ出す足は必然だ
うはの空の事ではない
是でも非でも
出さないでは堪らない足を出す
牛だ
出したが最後
牛は後へはかへらない
そしてやつぱり牛はのろのろと歩く
牛はがむしやらではない
けれどもかなりがむしやらだ
邪魔なものは二本の角にひつかける
牛は非道をしない
牛はただ為たい事をする
自然に為たくなる事をする
牛は判断をしない
けれども牛は正直だ
牛は為たくなつて為た事に後悔をしない
牛の為た事は牛の自信を強くする
それでもやつぱり牛はのろのろと歩く
何処までも歩く
自然を信じ切つて
自然に身を任して
がちり、がちりと自然につつ込み喰ひ込んで
遅れても、先になつても
自分の道を自分で行く

雲にものらない
雨をも呼ばない
水の上をも泳がない
堅い大地に蹄をつけて
牛は平凡な大地を行く
やくざな架空の地面にだまされない
ひとをうらやましいとも思はない
牛は自分の孤独をちやんと知つてゐる
牛は喰べたものを又喰べながら
ぢつと淋しさをふんごたへ
さらに深く、さらに大きい孤独の中にはいつて行く
牛はもうと啼いて
その時自然によびかける
自然はやつぱりもうとこたへる
牛はそれにあやされる
そしてやつぱり牛はのろのろと歩く
牛は馬鹿に大まかで、かなり無器用だ
思ひ立つてもやるまでが大変だ
やりはじめてもきびきびとは行かない
けれども牛は馬鹿に敏感だ
三里さきのけだものの声をききわける
最善最美を直覚する
未来を明らかに予感する
見よ
牛の眼は叡智にかがやく
その眼は自然の形と魂とを一緒に見ぬく
形のおもちやを喜ばない
魂の影に魅せられない
うるほひのあるやさしい牛の眼

まつ毛の長い黒眼がちの牛の眼
永遠を日常によび生かす牛の眼
牛の眼は聖者の眼だ
牛は自然をその通りにぢつと見る
見つめる
きよろきよろときよろつかない
眼に角(かど)も立てない
牛が自然を見る事は牛が自分を見る事だ
外を見ると一緒に内が見え
内を見ると一緒に外が見える
これは牛にとつての努力ぢやない
牛にとつての自然だ
そしてやつぱり牛はのろのろと歩く
牛は随分強情だ
けれどもむやみと争はない
争はなければならない時しか争はない
ふだんはすべてをただ聞いてゐる
そして自分の仕事をしてゐる
生命(いのち)をくだいて力を出す
牛の力は強い
しかし牛の力は潜力だ
弾機(ばね)ではない
ねぢだ
坂に車を引き上げるねぢの力だ
牛が邪魔者をつつかけてはねとばす時は
きれ離れのいい手際だが
牛の力はねばりつこい
邪悪な闘牛師(トレドアル)の卑劣な刃にかかる時でも
十本二十本の槍を総身に立てられて

よろけながらもつつかける
つつかける
牛の力はかうも悲壮だ
牛の力はかうも偉大だ
それでもやつぱり牛はのろのろと歩く
何処までも歩く
歩きながら草を喰ふ
大地から生えてゐる草を喰ふ
そして大きな体（からだ）を肥す
利口でやさしい眼と
なつこい舌と
かたい爪と
厳粛な二本の角と
愛情に満ちた啼声と
すばらしい筋肉と
正直な涎を持つた大きな牛
牛はのろのろと歩く
牛は大地をふみしめて歩く
牛は平凡な大地を歩く

（十二月七日）

「牛」は「我等」大正三年一月号に発表された「詩数篇」の第三。百十五行、全一連の長詩であるが、七つの段落に分けることができる。

第一段落。「牛はのろのろと歩く」は、以後、「やつぱり牛は……」「そしてやつぱり牛は……」「それでもやつぱり牛は……」「そしてやつぱり牛は……」「それでもやつぱり牛は……」「それでもやつぱり牛は……」と形をかえて繰り返され、詩にゆったりとしたリズムを与えるとともに、段落を形成している。「歩く」は初出では「歩（ある）く」とルビ。「歩く」は、一歩一歩踏みしめて進む。牛の行動の基本であり、生きる姿勢である。歩き方は、「自分の行きたいところへ」「まつすぐに行く」のである。「牛はただでは飛ばない、ただでは躍らない」は、牛の悠然としたようすを強調したもの。「ただでは」は特別のことがない限りは、の意味であり、特別なことがあれば飛ぶことも暗示している。「がちり、がちりと／……はねとばし」は、牛の歩みの力強く、自然に食い入っているようすの表現。

第二段落。「牛は急ぐことをしない」――これも、牛の歩き方の、つまり、生き方の基本的な姿勢である。他に左右されず、自分のペースを守るようすである。「牛は力一ぱいに……／……信じきつて行く」の「地面」は「自然」の具体的な表れであり、生きる基盤である。「牛」の直前に書かれた「冬の詩」に、「自然を忘れるな、自然をたのめ」「大地の力を体感しろ」とあった。その「大地」である。初出では、「頼つて」は「頼（たよ）つて」とルビ、「信じきつて」は「信じ切つて」。「牛は自分の道を味はつて行く」というのは、生きることの意味を深く考えながら進むのである。「ふみ出す足は必然だ」は、内部の必然的な力にうながされて進んで行くこと。「うはの空の事ではない」は根拠のないことではない、ということで、前の行を言葉を変えて繰り返したもの。「是でも非でも」は道理にかなおうが、かなうまいが。善悪の判断よりも、内心の必然の要求を大切にすることを言っている。初出では、「牛は後へはかへらない」の「かへらない」は「帰らない」。次行も同じ。「かへる」は戻ること。

第三段落。「牛はがむしやらではない」は、牛はその本質として、決して、向こう見ずではない、ということ。「けれどもかなりがむしやらだ」というのは、前の段落にあるように、牛は「是でも非でも／出さないでは堪らない足を出す」のだから、時には、「かなりがむしやら」でもある、ということになる。「邪魔なものは二本の角にひつかける」は、「がむしやら」な時の一例である。「牛は非道をしない」は続く二行と関係がある。牛が「非道」（道理にもとること）をしないのは、「ただ為たい事をする」「自然に為たくなる事をする」からである。（心の）

「自然」に従っていれば、道を外れることはない、という確信が背後にある。第二段落の、「是でも非でも／出さないでは堪らない足を出す」が肯定されているのも、同じ考えに従っている。初出では、「為たくなる」は「したくなる」。「牛は判断をしない」のは、結果についてである。「牛は為たくなつて為た事に後悔しない」は、「牛は判断をしない」と重なる。内面の要求に従って行動することが大事なのであって、その結果は重視しない、ということである。「牛の為た事は牛の自信を強くする」のは、自然の要求に従ってしたことに誤りはないからである。

第四段落。「何処までも歩く」は、牛の歩みに終りのないことを言う。「自然を信じ切つて／自然に身を任して」は、第二段落には、「自分を載せてゐる自然の力を信じきつて」とあった。牛の行動の基本原理である。「任して」は初出では「任せて」。「がちり、がちりと自然につつ込み喰ひ込んで」は、第一段落には、「がちり、がちりと／牛は砂を掘り土を掘り石をはねとばし」とあった。「遅れても、先になつても／自分の道を自分で行く」――このあたりは、この詩の第二の出発で、ここまでに書いてきたことを確認し直している、という感じである。「雲にものらない／雨をも呼ばない／水の上をも泳がない」は、竜を想起させる。竜は深淵や海中に潜み、時に自由に空中を飛翔して、雲を起こし雨を呼ぶという。牛は突飛な、奇跡的なこととは無縁なのである。続いて、「堅い大地に蹄をつけて／牛は平凡な大地を行く」とある。「やくざな架空の地面にだまされない」の「やくざな架空の」は、まともでない、想像上の、「だまされない」は、心を奪われることがない、ほどの意味であろう。「ひとを」は初出では「他を」。「牛は自分の孤独をちやんと知つてゐる」――「さびしきみち」「人類の泉」以後、「孤独」への言及は繰り返され、次第にその意味は肯定されている。前作「冬の詩」には、「孤独を恐れるな、万人にわからせようとするな、第二義に生きるな」とあった。「牛は喰べたものを又喰べながら」は、反芻動物である牛が、一度のみこんだ食物を再び口中に戻し、さらに咀嚼して再びのみこむことに託して、「自分の孤独」を噛みしめることを言う。「ふんごたへ」は「ふみこたへ」の音便。「さらに深く、さらに大きい孤独の中にはいつて行く」の「孤独の中に」は初出では「孤独に」。「冬の詩」には、「孤独に深入りせよ」とあった。孤独が大きければ大きいほど、深ければ深いほど、魂は成長するのである。「牛はもうと啼いて／その時自然によびかける」の「その時」は「孤独」を感じた時。「自然によびかける」のは、「自然を信じ切つて／自然に身を任して」いるからである。「自然はやつぱりもうとこたへる」は、孤独の中で自然と交流し、一体化していることの表現。「牛はそれにあやされる」の「あやす」は幼児が機嫌よくなるようになだめること。つまり、自然と牛は、いうならば、親と子（のちに書かれる詩「道程」の内容を先取りすれば、父と子）の関係である。

第五段落。「牛は馬鹿に大まかで」の「馬鹿に」は、はなはだ、非常に、の意。「馬鹿に大まかで、かなり無器用だ」というのは、続く二行から、行動が機敏ではないということになる。そのくせ、「牛は馬鹿に敏感」なのである。「三里さきのけだものの声をきき分ける」というのは、牛の習性によるものであり、遠い同族の存在を敏感に感じ取り、慰められるのである。つぎの二行、「最善最美を直覚する／未来を明らかに予感する」は、芸術家の叡智の働きに重なる。第四段落の後半で、牛の孤独を問題にしたあたりから、牛と光太郎自身との一体化の動きが顕在化してきている。その「叡知」は、「自然の形と魂とを一緒に見ぬく」、つまり自然の全体、本質を一挙に見ぬき、「形のおもちやを喜ばない」、つまり表面的な慰めに惑わされず（第四段落に「やくざな架空の地面にだまされない」とあった）、「魂の影に魅せられない」、つまり魅せられるのは魂の実質にのみであって、その形骸に心引かれることはない、というのである。自然のまことを喜び、魂の真実に魅せられることの表現である。次に、その牛の眼が、「うるほひのあるやさしい牛の眼」「まつ毛の長い黒眼がちの牛の眼」（初出では「黒眼」は「黒瞳」）と具体的に描写される。しかし、次の行ではまた、「永遠を日常によび生かす牛の眼」と飛躍する。大正元年八月作の「おそれ」の、

「世界を夢に導き、刹那を永遠に置きかへようとする月」「私の魂は永遠をおもひ／私の肉眼は万物に無限の価値を見る」などに見られる、永遠にひとしい価値を持つ瞬間が存在するという把握からすれば、「永遠を日常によび生かす」とは、永遠にひとしい価値を持つ日常を生きる、ということになる。さらに「おそれ」に従えば、そこには、永遠の愛が存在するのである。このような眼は「聖者」（聖人）にこそふさわしいのである。この「聖者」は、宗教的な存在ではなく、「知徳が最もすぐれ、万人が仰ぎ師表とすべき人」（『広辞苑』第五版）というのが近いであろう。「牛は自然をその通りにぢつと見る」の「その通り」はあるがままに。初出では、「その」は「其の」。「きよろつかない」の「きよろつく」は、目玉を動かして、落ち着かないようすで、あたりを見まわすこと。「眼に角も立てない」の「眼に角を立てる」は、怒りをふくんで、鋭い目つきで見ること。「牛が自然を見る事は牛が自分を見る事だ」は、牛は自然と一体化しているから。「自然を信じ切つて／自然に身を任して」（第四段落）、牛は自然と一体化したのである。それだから、牛が「外を見ると一緒に内が見え／内を見ると一緒に外が見える」のである。「外」は自然、「内」は牛の内面である。そして、そうである以上、「これは牛にとつての努力ぢやない／牛にとつての当然だ」ということになる。自然、当然、必然である。

第六段落。「牛は随分強情だ／けれどもむやみとは争はない」は、第五段落の「牛は馬鹿に大まかで、かなり無器用だ／（中略）／けれども牛は馬鹿に敏感だ」と同じ言い回しである。「けれども」以下に中心がある。「争はなければならない時しか争はない」の「争はなければならない時」とは、争うことが自分の内面の必然に発した要求である時である。「ふだんはすべてをただ聞いてゐる／そして自分の仕事をしてゐる」は孤独に深入りし、孤独に徹して、仕事に熱中しているようすである。「生命をくだいて力を出す」は、仕事には、である。ここには「生命」イコール「力」という認識が見られる。大正二年二月作の「人に」では、「生である／力である」と「生」と「力」とが、また、大正二年十一月作の「山」では「『無窮』の力をたたへろ／『無窮』の生命をたたへろ」と、「力」と「生命」とが並列されている。また「牛」と同時発表の「粘土」（『道程』未収録）に、「僕は生（いのち）を削つて生（いのち）を肥やす」とある。「生命」は初出では「生（いのち）」。「牛の力は潜力だ」の「潜力」は、内にひそんでいる力。この言葉は、『道程』において、ここに初めて使われている。「弾機ではない／ねぢだ」は、牛の力は、瞬発的なものではなく、ゆっくりと、じわじわと働く力だ、ということ。二行おいて、「牛の力はねばりつこい」と念をおされる。「切れ離れのいい手際」は、思い切りのいいできばえ。「闘牛師」は「闘牛士」。「闘牛」は徒歩または騎乗の闘牛士と牛との決死的闘技。ギリシア・ローマで行われたが、今はスペインの国技として知られる。ルビの「トレドアル」は「トレアドル」の誤植。初出では「トレアドル」。「総身」は全身。闘牛士に全身に槍を立てられて、「よろけながらもつつかける」「牛の力はかうも悲壮だ／かうも偉大だ」は、「生命をくだいて力を出す」牛の生き方を具体的に述べたものである。

第七段落。牛が、「大地から生えてゐる草を喰ふ／そして大きな体を肥す」というのは、牛の生命の糧が大地、つまり、直接、自然から生ずるものであることを言い、牛が、あくまで、自然とともにあることを強調している。

以上のように、「牛」は、のろのろと歩き、自然を信じ、自然に身を任せ、したいことをし、孤独と淋しさに堪え、叡智に耀き、仕事にいのちを砕く牛の姿に、光太郎自身の人生態度を寓したものである。文中、前作「冬の詩」を多く引用したが、この時期に、光太郎の人生態度の確立を見ることができるのである。

僕　等

僕はあなたをおもふたびに

一ばんぢかに永遠を感じる
僕があり、あなたがある
自分はこれに尽きてゐる
僕のいのちと、あなたのいのちとが
よれ合ひ、もつれ合ひ、とけ合ひ
渾沌としたはじめにかへる
すべての差別見は僕等の間に価値を失ふ
僕等にとつては凡てが絶対だ
そこには世にいふ男女の戦がない
信仰と敬虔と恋愛と自由とがある
そして大変な力と権威とがある
人間の一端と他端との融合だ
僕は丁度自然を信じ切る心安さで
僕等のいのちを信じてゐる
そして世間といふものを蹂躙してゐる
頑固な俗情に打ち勝つてゐる
二人ははるかに其処をのり超えてゐる
僕は自分の痛さがあなたの痛さである事を感じる
自分を恃むやうにあなたをたのむ
自分が伸びてゆくのはあなたが育つて行く事だとおもつてゐる
僕はいくら早足に歩いてもあなたを置き去りにする事はないと信じ、安心してゐる
僕が活力にみちてる様に
あなたは若若しさにかがやいてゐる
あなたは火だ
あなたは僕に古くなればなるほど新しさを感じさせる
僕にとつてあなたは新奇の無尽蔵だ
凡ての枝葉を取り去つた現実のかたまりだ
あなたのせつぷんは僕にうるほひを与え
あなたの抱擁は僕に極甚の滋味を与へる
あなたの冷たい手足
あなたの重たく、まろいからだ
あなたの燐光のやうな皮膚
その四肢胴体をつらぬく生きものの力
此等はみな僕の最良のいのちの糧（かて）となるものだ
あなたは僕をたのみ
あなたは僕に生きる
それがすべてあなた自身を生かす事だ
僕等はいのちを惜しむ
僕等は休む事をしない
僕等は高く、どこまでも高く僕等を押し上げてゆかないではたまらない
伸びないでは
大きくなりきらないでは
深くなり通さないでは
——何という光だ、何といふ喜（ママ）だ

（十二月九日）

「僕等」は「我等」大正三年一月号に発表された「詩数篇」の第四。『智恵子抄』に収録。『道程』では三連の構成になっているが、改ページのための印刷のあやまりと判断して、初出の形に従う。

光太郎は、二人の間に働く恋愛感情を強く意識しはじめたころに書いた「おそれ」において、智恵子を「月」にたとえ、その月は、「世界を夢に導き、刹那を永遠に置きかへようとするもの」と意味づけている。「僕等」の二日前に書かれ、同時に発表された「牛」には、「永遠を日常によび生かす」という詩句がある。この詩句については、永遠にひとしい価値を持つ日常を生きる、ということであろう、と解説した。そして今、「僕はあなたを思ふたびに／一ばんぢかに永遠を感じる」

というのである。「おそれ」に従えば、「永遠」を思うとき、「肉眼は万物に無限の価値を見る」のである。すべてが、この上なく貴く思われる、というのは、非常な謙遜の姿勢を示すとともに、至福の状態の表現であろう。「一ばんぢかに」というのは、「あなた」イコール「永遠」ということであろう。「おもふ」は初出では「思ふ」。「僕があり、あなたがある／自分はこれに尽きてゐる」というのは、冒頭の二行を受けて、自然、当然の表現といえる。ただし、「自分」は、初出では「自然」で、『智恵子抄』では「自然」に戻っている。『道程』の誤植とみることもできるが、その場合、「自然」は世界の意であろう。「僕のいのちと、あなたのいのちとが／……／渾沌としたはじめにかへる」の「いのち」は、初出では「生」に「いのち」とルビ。以下、すべて同じ。「渾沌としたはじめにかへる」は、二人の生命がまったく一体化するようすの表現。「渾沌」は、世界の初め、天と地とのまだ分かれていない状態をいう。「すべての差別見」は、「すべての」といっているが、根本にあるのは、後続の詩行から見て、男女の間に差別をつける見方であろう。「僕等にとつては凡てが絶対だ」は、二人のあいだでは、お互いのすべてが絶対的な価値をもっている、ということ。「そこには世にいふ男女の戦がない」の「そこには」は「僕等」のあいだには、「世にいふ男女の戦」は、恋愛や結婚生活は男女間の戦いであるという俗説をいう。代わりに、「信仰と敬虔と恋愛と自由がある」というのである。「信仰」は、お互いに信じあい尊敬しあう、の意味であろう。「そして大変な力と権威とがある」の「大変な力と権威」は、前行の「信仰と敬虔と恋愛と自由」とから、自然に発生するものと考えられる。「力と権威」は、あえて対象を必要としない、精神的、道徳的なものであろう。「人間の一端と他端との結合だ」の「一端と他端」とは、男と女ということであろう。男女を人間の両端であると、その差異は認めるが、そこに差別の意識を入り込ませない、という考え方である。「僕等にとつては凡てが絶対である」という以上、僕等の間に「男女の戦がない」のは、一見、当然のようであるが、僕等が「人間の一端と他端の結合」であるからには、いくら差別の意識を入り込ませない、と力んで見ても、それは空しい、言葉の上だけの結果に終わるであろう。光太郎はのちに「智恵子の半生」において、「彼女も私も同じ様な造型美術家なので、時間の使用について中々むつかしいやりくりが必要であつた。互にその仕事に熱中すれば一日中二人とも食事も出来ず、掃除も出来ず、用事も足せず、一切の生活が停頓してしまふ。さういふ日々もかなり重なり、結局やつぱり女性である彼女の方が家庭内の雑事を処理せねばならず（中略）ますます彼女の絵画勉強の時間が食はれる事になるのであつた。」と書き、それを「彼女がつひに精神の破綻を来すに至つた」第一の原因とみなさざるをえなかったのであるが、このような事の背後にこそ、光太郎は意識しなかったかもしれないが、「男女の戦」はひそんでいたのである。

「僕は丁度自然を信じ切る心安さで／僕等のいのちを信じてゐる」と言い切ることができるのは、二人の「いのち」は、「必然の理法と、内心の要求と、叡智の暗示とに」（「或る宵」大正元・10作）したがっている、という確信があるからである。しかし、ここで、「世間」や「俗情」に言及しないではいられないところに、光太郎の苦渋もある。「頑固な俗情に打ち勝つてゐる」は、実情に即せば、打ち勝たなければならない、ということであろう。「蹂躙」はふみにじること。「二人ははるかに其処をのり超えてゐる」の「はるか」は初出では「遥か」、「のり超えて」は「乗り超えて」。ここも、「のり超えてゐる」と信じたい、というのが実状であろう。

「僕は自分の痛さがあなたの痛さである事を感じる」以下の五行は、ふたりの完全な一体感に対する確信の表明である。ただし、ここに、「あなたの痛さが自分の痛さである」という認識の示されないことは、大正二年三月作の「人類の泉」に、「あなたは私の為めに生れたのだ」とありながら、「私はあなたの為めに生れたのだ」と続かないことと同じ問題を含んでいる。「恃む」は力とする。「自分が伸びてゆくのは」の「ゆくのは」は初出では、「伸びてゆくのも」。一体感といったが、

「自分が伸びてゆくのはあなたが育つて行く事だ」には、やはり、自分が主で智恵子が従という光太郎の意識がすけてみえる、といわれても仕方のないところである。つづく「僕はいくら早足に歩いてもあなたを置き去りにする事はない」も同様である。この句は、智恵子への信頼を語っているのであるが、智恵子の速度に合わせることは考えられていないのである。「歩く」は、「いのち」をのばし、成長すること。「置き去り」は初出では「置きざり」。「あなたは若若しさにかがやいてゐる」の「若若しさ」は初出では「わかわかしさ」、「ゐる」は「ゑる」と誤植。「あなたは火だ」の「火」は光りと熱を発する神聖なもの。「あなたは僕に古くなればなるほど新しさを感じさせる」の「古くなればなるほど」は、時間がたてばたつほど、ということであろう。知れば知るほど、新鮮さを感じさせる、ということか。だから、「僕にとつてあなたは新奇の無尽蔵だ」ということになる。「新奇」は目新しく、普通でないこと。「無尽蔵」は取っても取っても尽きないこと。「凡ての枝葉を取り去つた現実のかたまりだ」は、同時に発表された短詩「現実」――「感激の枝葉を刈れ／感動の根をおさへろ」をふまえている。この短詩は、表現について語ったものであるが、人生的に読めば、「現実」は「実現」ということになる。本質的なものの現れである。「あなたのせつぷんは僕にうるほひを与へ」以下の六行は、「あなた」の「生きもの」としての魅力を肉体に即して語ったもの。「極甚の滋味」は、この上なく豊かな深い味わい。「燐光のやうな」は、青白く輝くということ。「その四肢胴体をつらぬく生きものの力」――女の「生きものの力」は、明治四十四年七月作の「けもの」においては、「きたならしく」「いまはしいもの」として否定的に把握されていたが、今や、賛嘆されるものに変化している。女こそ自然そのものなのである。そして、「あなた」の肉体は、「僕の最良のいのちの糧となるもの」であると認識される。「糧」のルビは『道程』では「かへ」であるが、誤植と見て訂正した。初出にはルビなし。「よろこびを告ぐ」には、「すべての生（いのち）から生（いのち）の肥料を求めるだらう」とあったが、光太郎は、今や「最良のいのちの糧」を得たのである。「あなた」は「僕」の成長を助ける。一方、「あなたは僕をたのみ／あなたは僕に生きる」、つまり、「あなた」は「僕」をたのみとし、「僕」によって生きる、「それがすべてあなた自身を生かす事だ」というのである。この詩の第二十一行では「自分を恃むやうにあなたをたのむ」といっていたのに、ここでは、第二十二行「自分が伸びてゆくのはあなたが育つて行く事だとおもつてゐる」と同じ、「僕」が主で「あなた」が従という関係が打ち出されている。「僕等はいのちを惜しむ」の「惜しむ」は、大切にする、いつくしむ、の意。「僕等は高く、どこまでも高く」は精神的に、である。初出では「どこまでも」はなし。「僕等を押し上げてゆかないではたまらない」は、初出では、「ゆかないでは」は「行かないでは」、「たまらない」は「たまられない」。「たまらない」は我慢できない、の意。「伸びないでは」以下の三行は、初出では一行仕立て。いずれの行も、「たまらない」が省略されている。「――何といふ光だ、何といふ喜だ（ママ）」の「光」は「僕等」の未来を祝福する光であり、「喜」は、その祝福を受ける「僕等」の心に湧く喜びであろう。「何といふ喜だ」は初出では「何といふよろこびだ！」。

この詩は、自分たちの愛の形と、二人の一体感をうたい、また愛人の素晴らしさをたたえ、二人は大いなる光の中を深い喜びをもって成長してゆくであろうことを、強い確信をもってうたったものである。しかし、光太郎の語る一体感、二人の生き方に、「僕」（光太郎）が主であり、「あなた」（智恵子）が従であるという男性中心の意識が、「人類の泉」と同様に、どうしても透けて見えるのである。

一九一四年

道程

僕の前に道はない
僕の後ろに道は出来る
ああ、自然よ
父よ
僕を一人立ちにさせた広大な父よ
僕から目を離さないで守る事をせよ
常に父の気魄を僕に充たせよ
この遠い道程のため
この遠い道程のため

（二月九日）

「道程」は「美の廃墟」大正三年三月号（未見）に発表された。といっても、それは全百二行の長詩で、『道程』に収録されたのは、その最後の七行を独立させ、若干の補訂をほどこしたものである。

「道程」は、ある所、状態に至るまでの道すじをいう。この詩の場合、目指して行く、ある所、ある状態は示されていない。行き先は、まだ見えていない、といってもよい。直観として把握されていないわけではないが、明言するには至っていないのである。いや、今は歩きつづけること、道を開いてゆくことこそ肝要なのである、ということにしておいて、この問題は、この項の最後に考えたい。

光太郎は、大正元年十月作の「さびしきみち」において、「かぎりなくさびしけれども／われは／すぎこしみちをすてて／まことにこよなきちからのみちをすてて／いまだしらざるつちをふみ／かなしくもすすむなり」とうたっている。道は人生の道である。過去を捨てて、新しい自分を生きようという決意の表明である。「さびし」「かなし」と繰り返しながらも、その新しい道を行くことこそ、「わがこころのおきて」「わがこころのさけび」と確認し、また、「さびしさ」「かなしさ」を、「わがこころのちちはは」「わがこころのちからのいづみ」と認識して、むしろ、それらを支えに、「あたらしきみち」、自分の道を行こうとしているのである。「きのふはあぢきなくもすがたをかくし／かつてありしわれはいつしかにきえさりたり」という、過去の自分とまったく切り離された、「わがこころ」以外に頼るもののない状態での出発である。そして、大正二年三月作の「人類の泉」において、光太郎は「あなた」（長沼智恵子）に向かって、「さびしきみち」をふまえる形で、「私は自分のゆく道の開路者です」と声高々と宣言し、「私は今生きてゐる社会で／もう万人の通る道路から数歩自分の道に踏み込みました／（中略）／私は此の孤独を悲しまなくなりました／此は自然であり、又必然であるのですから／そして此の孤独に満足さへしようとするのです。」と解説し、「けれども／私にあなたが無いとしたら――」と、「あなた」の存在の必要を訴えるのである。

「僕の前に道はない／僕の後ろに道は出来る」は、光太郎がその「開路者」としての生き方、姿勢を、誇りをもって宣言したものである。「ああ、自然よ／父よ」と、「自然」を「父」と呼ぶのは、光太郎としては初めてである。その意味は、次の、「僕を一人立ちにさせた広大な父よ」が説明している。後掲の初出では、自分が歩いてきた「曲りくねり／迷ひまよつた道」を振り返って、「戦慄に値ひする」道だと思うが、「此が生命に導く道だつた」ことに気付くのである。そして、「此のさんたんたる自分の道を見て／僕は自然の広大ないつくしみに涙を流すのだ／あのやくざに見えた道の中から／生命の意味をはつきりと見せてくれたのは自然だ／これこそ厳格な父の愛だ」と、自分の「生命の意味」の発見は、「自然の広大ないつくしみ」、自然の導きによるものであるとして、それを「厳格な父の愛」と呼んでいるのである。

光太郎における「自然」の意味を、初めて明らかにしたのは、大正元年十月作の「或る宵」である。そこでは、「我等は為すべき事を為し／進むべき道を進み／自然の掟を尊んで／行住座臥我等の思ふ所と自

然の定律と相戻らない境地に到らなければならない」とあり、自然は、生きてゆく上での規範を示すものとして把握されている。「自然の定律」の「律」は、おきて、きまり、法則の意味で、同じ詩中の「必然の理法」と同じと見てよい。ここに光太郎は、自然随順の姿勢を明確にしたのであるが、「自然」の内容が観念的であるとの批判は免れがたい。光太郎は、次いで、大正元年十一月作の「冬の朝のめざめ」において、「大きなる自然こそは我が全身の所有なれ」と、自然との強い一体感をうたい、前出の「人類の泉」における「孤独」についても、それが「自然であり、又必然である」との理由によって、悲しまず、むしろ、「満足さへしようとする」のである。その「自然」が、今、人格化され、光太郎により親身なものとして、寄り添っているのである。「一人立ちにさせた」は、自立させてくれた、ということであるが、光太郎にこのような認識が生まれたのは、おそらく、「冬の詩」を書きえての上のことであろう。自然の本質をあらわにする「冬」という季節に「峻烈の愛」「裸の愛」を見、「冬だ、冬だ、何処もかも冬だ／見渡すかぎり冬だ／その中を僕はゆく／たつた一人で――」と「冬の詩」をうたい終えた時、光太郎は自分の自立を心の底から確信しえたものであろう。

「僕から目を離さないで守る事をせよ」は、自然への祈りを命令形で表現したもの。続く「常に父の気魄を僕に充たせよ」も同じである。「この遠い道程のため」の「道程」は、直接的には光太郎の人生の道程であるが、「冬の詩」に「自然に根ざした孤独は、とりもなほさず万人に通ずる道だ」とあり、後掲の初出に、「ああ／人類の道程は遠い／そして其の大道はない」とあるのを見ると、光太郎の道程は、「人類の道程」と重なっているという意識を見てとることができる。ただし、この「人類の道程」の内実は明かとはいい難い。「この遠い道程のため」（「ため」は初出では「為」）は初出では一行であるが、繰り返されているのは、強調と韻律効果のためであろう。

以上のように、この「道程」一篇は、光太郎が長い苦闘の果てに、ついに確立しえた生きる姿勢を表明したもので、「失はれたるモナ・リザ」に始まる『道程』の詩は、この一篇に集約されたということができるであろう。

なお、「道程」の原形は次のとおりである。「美の廃墟」誌は未見のため、『全集』による。

道程

どこかに通じてゐる大道を僕は歩いてゐるのぢやない
僕の前に道はない
僕の後ろに道は出来る
道は僕のふみしだいて来た足あとだ
だから
道の最端にいつでも僕は立つてゐる
何といふ曲りくねり
迷ひまよつた道だらう
自堕落に消え滅びかけたあの道
絶望に閉ぢ込められたあの道
幼い苦悩にもみつぶれたあの道
振り返つてみると
自分の道は戦慄に値ひする
四離滅裂な
又むざんな此の光景を見て
誰がこれを
生命（いのち）の道と信ずるだらう
それだのに
やつぱり此が生命（いのち）に導く道だつた
そして僕は此処まで来てしまつた
此のさんたんたる自分の道を見て
僕は自然の広大ないつくしみに涙を流すのだ

あのやくざに見えた道の中から
生命（いのち）の意味をはつきりと見せてくれたのは自然だ
これこそ厳格な父の愛だ
子供になり切つたありがたさを僕はしみじみと思つた
どんな時にも自然の手を離さなかつた僕は
たうとう自分をつかまへたのだ
恰度そのとき事態は一変した
俄かに眼前にあるものは光りを放射し
空も地面も沸く様に動き出した
そのまに
自然は微笑をのこして僕の手から
永遠の地平線へ姿をかくした
そしてその気魄が宇宙に充ちみちた
驚いてゐる僕の魂は
いきなり「歩け」といふ声につらぬかれた
僕は武者ぶるひをした
僕は子供の使命を全身に感じた
子供の使命！
僕の肩は重くなった
そして僕はもうたよる手が無くなつた
無意識にたよつてゐた手が無くなつた
ただ此の宇宙に充ちみちてゐる父を信じて
自分の全身を投げうつのだ
僕ははじめ一歩も歩けない事を経験した
かなり長い間
冷たい油の汗を流しながら
一つところに立ちつくして居た
僕は心を集めて父の胸にふれた
すると
僕の足はひとりでに動き出した
不思議に僕は或る自憑の境を得た
僕はどう行かうとも思はない
どの道をとらうとも思はない
僕の前には広漠とした岩畳な一面の風景がひろがつてゐる
その間に花が咲き水が流れてゐる
石があり絶壁がある
それがみないきいきとしてゐる
僕はただあの不思議な自憑の督促のままに歩いてゆく
しかし四方は気味の悪い程静かだ
恐ろしい世界の果へ行つてしまふのかと思ふ時もある
寂しさはつんぼのやうに苦しいものだ
僕は其の時又父にいのる
父はその風景の間に僅かながら勇ましく同じ方へ歩いてゆく人間
　を僕に見せてくれる
同属を喜ぶ人間の性に僕はふるへ（ママ）立つ
声をあげて祝福を伝へる
そしてあの永遠の地平線を前にして胸のすく程深い呼吸をするの
　だ
僕の眼が開けるに従つて
四方の風景は其の部分を明らかに僕に示す
生育のいい草の陰に小さい人間のうぢやうぢや這ひまはつて居る
　のもみえる
彼等も僕も
大きな人類といふものの一部分だ
しかし人類は無駄なものを棄て腐らしても惜しまない
人間は鮭の卵だ
千万人の中で百人も残れば
人類は永遠に絶えやしない

棄て腐らすのを見越して
自然は人類の為め人間を沢山つくるのだ
腐るものは腐れ
自然に背いたものはみな腐る
僕は今のところ彼等にかまつてゐられない
もつと此の風景に養はれ育まれて
自分を自分らしく伸ばさねばならぬ
子供の父のいつくしみに報いたい気を燃やしてゐるのだ
ああ
人類の道程は遠い
そして其の大道はない
自然の子供等が全身の力で拓いて行かねばならないのだ
歩け、歩け
どんなものが出て来ても乗り越して歩け
この光り輝く風景の中に踏み込んでゆけ
僕の前に道はない
僕の後ろに道は出来る
ああ、父よ
僕を一人立ちにさせた父よ
僕から目を離さないで守る事をせよ
常に父の気魄を僕に充たせよ
この遠い道程の為め

作品「道程」は、自然を信じ、自然とともに進もうという人生的決意、姿勢を、「開路者」としての誇りとともにうたったものである。それに対して、「道程」の原形（以後、「原形」と記す）は、その前に、その自覚にいたる道程をも述べている。幾つか、注目すべき問題を含んでいるが、ここでは、一つだけ触れておきたい。

それは、自分の歩いてきた道が「生命に導く道だつた」ことに気付いた時、それは、「自分をつかまへた」時でもあったが、「恰度そのとき事態は一変した／俄かに眼前にあるものは光りを放射し／空も地面も沸く様に動き出した」というところである。これが大正二年十二月作の「よろこびを告ぐ」の、「今こそ喜びの時は来た／太陽のかがやく大道のまつただ中に奇蹟は起つた／失はれた道は与へられ／夢は砕け去り／まよはしは尾を巻いて遠く逃げ／おぼろにけむる美しさは／隅隅までも照し渡る光の中に全身をあらはし／すべての能はただ一条の力の中にあざなはれる時が来た」という表現と重なることである。これは、自分の内に「新しき力」の誕生を確信した時の表現である。両者は、ともに、それが外からあふれるような「光」とともに「奇蹟」のように訪れたことを語っている。光太郎は、実際に、このような事態を体験したのであろうか。今は、そのように受け取るよりほかにないのであるが。そして、それは次の「自憑の境」へと続いてゆく。

「父」である自然に対して、「子供の使命」を感じ、「歩け」という命令に従おうとしたが「一歩も歩けない」。「かなり長い間／冷たい油の汗を流しながら／一つところに立ちつくし」た後、「心を集めて父の胸にふれ」ると、「僕の足はひとりでに動き出した／不思議に僕は或る自憑の境を得た／僕はどう行かうとも思はない／どの道を取らうとも思はない／……／僕はただあの不思議な自憑の督促のままに歩いてゆく」という、「自憑の境」である。これは、自然にすべてを委ねた結果得られたもので、自然への絶対的な信頼を語っているわけであるが、それを「自憑の境」と受け取ったのは、それより外に語りようがなかったのであろうが、肝腎のところが神秘性のなかに溶解されてしまっているような思いは残る。

愛の嘆美

底の知れない肉体の欲は

あげ潮どきのおそろしいちから——
なほも燃え立つ汗ばんだ火に
火龍（サラマンドラ）はてんてんと躍る

ふりしきる雪は深夜に婚姻飛揚（ヴォル、ニユプシアル）の宴（うたげ）をあげ
寂寞（じやくまく）とした空中の歓喜をさけぶ
われらは世にも美しい力にくだかれ
このとき深密（じんみつ）のながれに身をひたして
いきり立つ薔薇いろの靄に息づき
因陀羅網の珠玉に照りかへして
われらのいのちを無尽に鋳る

冬に潜む揺籃の魔力と
冬にめぐむ下萌（したもえ）の生熱と——
すべての内に燃えるものは「時」の脈搏と共に脈うち
われらの全身に恍惚の電流をひびかす

われらの皮膚はすさまじくめざめ
われらの内臓は生存の喜にのたうち
毛髪は蛍光を発し
指は独自の生命を得て五体に匍ひまつはり
道（ことば）を蔵した渾沌のまことの世界は
たちまちわれらの上にその姿をあらはす

光にみち
幸にみち
あらゆる差別は一音にめぐり
毒薬と甘露は其の筐を同じくし
堪へがたい疼痛は身をよぢらしめ
極甚の法悦は不可思議の迷路を輝かす

われらは雪にあたたかく埋もれ
天然の素中にとろけて
果てしのない地上の愛をむさぼり
はるかにわれらの生（いのち）を讃めたたへる

（二月十二日）

「愛の嘆美」は、「創造」大正三年三月号に発表された。

一読して明らかなように、深く激しく愛しあう二人が、「果てしのない地上の愛をむさぼり／はるかにわれらの生を讃めたたへる」ようすをうたったものである。

第一連。「底の知れない肉体の欲は／あげ潮どきのおそろしいちから」は、ふつふつとわき起こる性欲の激しさを「あげ潮どき」のおそろしいほどの波の力に例えたものである。「潮どき」は潮水のさしひきする時で、潮の差し引きに従い、生命感も充実し、欠落するという考えをふまえたものである。明治四十四年二月作の「亡命者」に「わが心は蝕へり／うつろに、くろく、しんしんと／潮時来れば堪へがたし」とあるが、こちらは潮水の引く時であろう。「なほも燃え立つ汗ばんだ火」は、「肉体の欲」の止まることを知らないようす。「汗ばんだ火」は汗にぬれた肉体からの連想か。「火龍」salamandre（仏）は蛇ないしいもりの形をした西洋の伝説上の動物。通常「火蛇」と訳される。火中に住むと信じられた。「てんてんと躍る」は蛇が火中に躍動するようすをいうのであろう。「肉体の欲」が、可視的に、幻想的に、美しく表現されている。

第二連。「ふりしきる雪は深夜に婚姻飛揚の宴をあげ」の「ヴォル、ニユプシアル」はvol nuptial（仏）。深夜に雪が降りしきるようすを、「婚姻飛揚の宴」の華やぎと見立てるのは、自己の心情の反映である。「われらは世にも美しい力にくだかれ」以下この連は、「肉体の欲」に

陶酔しきっているようすを、神秘的に表現したもの。「世にも美しい力」は、「肉体の欲」という形で現れた自然の力をこのように表現したものであろう。「くだかれ」は肉体が微塵となって、自然と一体化しているようす。「深密の流れに身をひたして」の「深密」は、仏教語。奥深い秘密の教え。性を通して、自然の奥深い秘密に触れるということか。「いきり立つ薔薇いろの靄に息づき」は、はげしく立ちのぼる薔薇いろの靄の中に呼吸し、の意味。「薔薇いろの靄」は「肉体の欲」が美しく発散するようす。「因陀羅網の珠玉に照りかへして」の「因陀羅」はインドラ。Indra（梵語）。インドのヴェーダ神話に見える雷霆の神。戦車で空中を疾駆し、猛威を振るう軍神。仏教に入って、仏法を守護する帝釈天となった。「因陀羅網」は、インドラの住む宮殿を飾っている網。その無数の結び目の一つ一つに宝珠があり、その一つ一つが互いに映えあうところから、宇宙の全存在が互いに関連しつつ存在することにたとえる。つまり、この一行は、自分たちも宝珠の一つとして宇宙の一存在であることを実感しているようす。「われらのいのちを無尽に鋳る」の「鋳る」は、金属を溶かして鋳型に流し込み、固めて器物を作ることであるが、我らの「いのち」を一つに融合させ、どこまでも、どこまでも鍛えあげるという意味であろう。

第三連。「冬に潜む揺籃の魔力」は、冬という季節は、万物にとっての揺籃期である、という認識をもとにしている。「揺籃期」はゆりかごに入っている幼年時代のことであるが、転じて、物事の発達の初めの時代をいう。「冬の詩」に、「冬は未来を包み、未来をはぐくむ」ともあった。春に芽生えるものは、冬の間に、ひそかに、その準備を進めているのである。それをうながすもの、それが、「冬に潜む揺籃の魔力」である。「冬にめぐむ下萌の生熟」の「めぐむ」は、草木が芽をだすこと。「下萌」は、春、草が芽生えること。「生熟」は生成のエネルギーの意味であろう。前の行と合わせて、冬という季節に潜む生成のエネルギー（冬の潜力とでもいうべきもの）の認識を表現したもの。次の行の、「すべての内に燃えるもの」は、それを自分たちの内部の潜在的なエネルギーに転化したもの。「「時」の脈搏と共に脈うち」は、時間の流れに従い、ということであるが、この「時」は二人の内部に生き生きと流れる時間であろう。「冬の潜力」のような、「われら」の内部に潜むエネルギー、それが二人の内部に流れる生成の「時」の律動と合致し、「われらの全身に恍惚の電流をひびかす」、つまり、恍惚感が身内を貫いて走り抜けるのである。

第四連。「われらの皮膚はすさまじくめざめ／われらの内臓は生存の喜にのたうち／毛髪は蛍光を発し／指は独自の生命を得て五体に葡ひまつはり」の四行は、性の営みを憶することなく、正面から描ききったものである。「道を蔵した」は、言葉をしまい込んだ、言葉を不要のものとしたの意か。「道」を「ことば」と使う例は、中国の古典には無いが、「言う、話す」と使う例はある。古くは、『詩経』鄘風の「牆有茨」に「中冓之言　不可道也／所可道也　言之醜也」（中冓ノ言ハ　道フ可カラザルナリ／道フ可キ所ナレドモ　之ヲ言ヘバ醜ケレバナリ）とある。光太郎は、この「道」という動詞を名詞化して使ったものか。「渾沌のまことの世界は」の「渾沌」は、天地はもと混沌として一つであったものが分離したものとする中国古代の思想から、天地のまだ分れなかった状態をいう。その「渾沌」にこそ、全ての生命の根源がある、という思想である。それを「われら」に重ねると、「われら」の生命が一体化したことである。

第五連は、「われらの上に」あらわれた「渾沌のまことの世界」の表現である。「光にみち／幸にみち」は、まず、その全体のようすを述べたもの。「あらゆる差別は一音にめぐり」は、あらゆる差別のないこと。「差別」は、主として、男女間の差別をいうのであろう。「一音」は、仏の説く法は何人に対しても同一である、という意味。「毒薬と甘露はその筐を同じくし」は、「毒薬」と「甘露」は同じ入れ物に入っているということで、両者は表裏一体を成している、ということ。「甘露」は、甘いしずくであるが、バラモン教の根本聖典ヴェーダでは、神々の飲料で不死の霊薬とされる。「筐」は、食料、書物、衣服などを入れる竹

のかご。「堪へがたい疼痛は身をよじらしめ／極甚の法悦は不可思議の迷路を輝かす」の「疼痛」が「毒薬」に、「法悦」が「甘露」にそれぞれ対応する。「堪へがたい……輝かす」は恍惚とするような性の歓喜の状態、エクスタシーを表現したもの。明治四十四年六月作の「新緑の毒素」では、「苦しき忘我と／たのしき疼痛」と表現している。

第六連。「われらは雪にあたたかく埋もれ／天然の素中にとろけて」は、うっとりと、自然と一体化したようすの表現。「天然」は、人為の加わらない自然のままの状態。橘川次郎氏は、「天然」について、「その生成や起源に人間が全く関与していないことを強調するのに、自然ではなく天然という言葉が使われている」と説明している。光太郎の意識においては、「天然」は自然より上位の概念であると考えられる。「素」は構成要素の意味。「果てしのない地上の愛をむさぼり／はるかにわれらの生を讃めたたへる」の「はるかに」は、前行の「地上」に対して、「天上に向かつて」の意味がこめられていると見てよいであろう。

吉本隆明は、この「愛の嘆美」や「晩餐」というような「情欲の生理的機制」をうたった作品が、「『道程』前期のようなデカダンスの代償としての生理的放蕩の意味をうしなって、生命力の「自然」な発現というほどの意味をもつようになっている」と指摘しているが、その点については、すでに繰り返し言及してきたとおりである。

群集に

一人の力を尊び
一人の意味をしのべ
むらがりわめき、又無知の声をあげるかの人人よ
逃げる者も捕らへる者も
攻める者も守る者も
ひとしく是れ魂の無い動揺（ゆらめき）だ
いのちある事実にならない事実
埋草にもならぬ塵埃（ちりあくた）の昂奮だ
さめよ
一人にめざめよ
眉をあげて怒る汝等の顔の淋しさを見よ
其のたよりなさと、不安と
幕を隔てた汝等自身の本体の無関心と
重心なき浮動物のかろがろしさと——
汝等すべての其の貧しさを見よ
いま向かうから出る
あのまんまろな月を見よ
静かな冬の夜のこの潜力を感ぜよ
汝等の心に今めぐみつつある
破壊性と残忍性と異常な肉体の欲望とにめざめよ
その貴い人間性のまへに汝等自身を裸体にせよ
そして一人にせめよ
汝一人の力にかへる事をせよ
哀れなこの群集と群集との無益（むやく）な争闘に対して
自然のいのちを思ふ事の無意味を知れ
汝等は道路にしかれる砂利の集団だ
汝等は偶然に生き、偶然に死に
張合に生き、張合に死に
又気質に生き、気質に死ぬ
さめよ
一人にめざめよ
一人の力を尊び
一人の意味をしのべ
汝等の焦心に何の値があろう

汝等の告白に何の意味があろう
ああ、群集よ
夜の群集よ
又思想および芸術にかかる群集よ
群集を生命とする群集よ
空しき汝等一人の声に耳を向けよ
きつかけに生き、提言に生きる事を止めよ
偶像の中にもぐり込む事を止めよ
しらじらしい汝等の虚言を止めよ
群集によつて押される浮動（エフエエル）の潮流を蔑ろにせよ
一人の実体にしみ通り
一人の根を深め
一人の地下泉を掘り出せよ
こんこんとして湧き上る生水（きみず）を汲めよ
偶然はあとをたち
思ひつきは価値を失ひ
其処にこそ自然に根ざした人間はまろく立ち現はれるのだ
一人の力を尊び
一人の意味をしのべ
むらがりわめき、又無知の声をあげるかの人人よ
寒い風に凍てて光るあの大きな月を見よ
月は公園の黒い木立と相摩して光る
まんまろに皎然と光る

（二月十六日）

「群集に」は「我等」大正三年三月号に発表された。大正三年二月十日、シーメンス事件に発した倒閣国民大会の騒乱が背景にあると考えられている。シーメンス事件は、大正三年に起こった艦船購入をめぐる日本海軍の収賄事件。ドイツのジーメンス会社の元東京支店員のベルリンでの裁判中、海軍首脳の同社からの収賄が発覚、野党同志会の島田三郎らによる責任追及をはじめ世論の攻撃を受け、海軍首脳および三井物産の関係者が検挙され、第一次山本権兵衛内閣は総辞職した、というものである（百科事典『マイペディア』による）。二月十日には、立憲同志会、国民党、中正会の三派による山本内閣弾劾決議案が上程されたのだが、この日の出来事を、今井清一氏は次のように述べている。「この日、日比谷公園には内閣糾弾の国民大会が開かれ、つづいて数万の群衆が議会をとりかこんだ。そこに、政友会の松田源治が演説のなかで民衆を暴民と呼んだということが伝えられると、民衆は激昂して議会の正門を破壊した。弾劾案が否決されると民衆の興奮はいっそう高まり、夜にはいっても解散せず、政府系の中央新聞社や毎夕新聞社にデモをかけた。閣僚や与党議員は議院に閉じこめられ、陸軍に出兵をもとめたが、いっこうに出動せず、やむをえず警官に血路を開かせてやっとのことで退散した。麻布の第三連隊から一個大隊がラッパの音を響かせて出動したのは、数時間後のことであった。」（『日本の歴史23　大正デモクラシー』中公文庫、昭和49・9）

「群集に」の「群集」については、『広辞苑』第五版に「〔心〕多数の人間が一時的・非組織的につくった集団で、共通の関心をひく対象に向かって類似の仕方で反応するが、一般的には浮動的で無統制な集まり」とある。

冒頭の「一人の力を尊び／一人の意味をしのべ」は、群集に向かって、一人一人の「力」と「意味」を思い、集団を離れ、「一人」の世界に戻るように呼び掛けたもの。初出では「一人」の「人」に「にん」とルビ。つまり「一人」は「いちにん」と読む。以下同じ。この二行は、この詩の中で三度繰り返され、この詩の主題を明らかに示している。「しのべ」は、思いをはせよ、の意味。「一人」であること、つまり、個、個人、個性の確立、重視は、光太郎のパリ留学中に心に深く刻み込まれたもので、詩においては、明治四十五年七月作の、長沼智恵子にあてた「――に」（初出では「N――女史に」）において、結婚

を「一人の世界から／万人の世界へ」「身を売る」ことだと決めつけて以来、繰り返し主張されている。「むらがりわめき、又無知の声をあげるかの人人よ」は、「群集」への反感、否定の意思をあらわに表明したもの。初出では、「むらがりわめき」は「むらがり、わめき」、「無知」は「無智」、「かの人人」は「彼の人人」。「逃げる者も捕へる者も／攻める者も守る者も」は、倒閣国民大会の騒乱が背景にあることが読みとれる句。この大会には数万の群集が集まり、警察や憲兵隊に数百名が逮捕された。「逃げる者」「攻める者」が群集を、「捕へる者」「守る者」が警察側をさす。初出では、「逃げる者も、捕へる者も／攻める者も、守る者も」。「ひとしく是れ」の「是れ」は語調をととのえ、口調を強める働きの感動詞。「魂のない動揺だ」の「魂」（初出では「たましひ」とルビ）は、この場合、一般的には、思慮、分別の意味が近いが、より精神的な意味合いを読みとるべきであろう。「いのちある事実にならない事実」は、事実ではあるが、その事実は、生きた内容のない、空虚なものにすぎない、の意味。「いのち」は初出では「生」に「いのち」とルビ。以下も同じ。「埋草」は雑誌などにできた空白部分を埋めるために用いる短文。あまり意味のないものが多いが、その「埋草にもならぬ塵埃の昂奮」と、群集としての行為は、まったく意味のないものであると、決めつけている。

「さめよ／一人にめざめよ」は、「一人の力を尊び／一人の意味をしのべ」と同じ意味である。「一人の力を尊び／一人の意味をしの」ぶことが、すなわち、「一人にめざめ」ることである。「眉をあげて怒る」の「眉をあげる」は、眉をつりあげる。怒ったようすにいう慣用句。「汝等の顔の淋しさ」は、「其のたよりなさと、不安と／幕を隔てた汝等自身の本体の無関心と／重心なき浮動物のかろがろしさと」から生じている。「たよりなさと、不安」は、現在の行為が心の真実の要求から発したものでないところから生まれている。「幕を隔てた汝等自身の本体の無関心」は、群がりわめいていても、群集の一人一人の主体は、この事件に、実は無関心なのだ。ということ。「汝等自身」は初出では「汝自身」。「重心なき浮動物のかろがろしさ」は、群集の一人一人の心の動きをきめつけたもの。「浮動物」はたえず漂い動いているもの。これらの心のはたらきが、「貧しさ」、つまり、心の貧しさの表れなのである。「あのまんまろな月を見よ」の「まんまろな月」は、「淋しさ」「貧しさ」と対照的な、全的なもの、充実の表現か。「静かな冬の夜のこの潜力」は、静かな冬の夜の底に潜んでいるエネルギー。四日前の作品「愛の嘆美」には、「冬に潜む揺籃の魔力」という句があった。「この潜力」の「この」は、光太郎がそれを今、体感していることを示している。「汝等の心に今めぐみつつある／破壊性と残忍性と異常な肉体の欲望にめざめよ」の、「破壊性と残忍性と異常な肉体の欲望」は、虚飾をとり払ったところに表れる人間の原始的な本能をいう。大正元年八月作の「夏の夜の食欲」に、「私の魂はこの時、四足獣のむかしを忍び／曾て野にさまよつて餌を求つた習性を懐かしみ／又、闇黒の喜びにふるへ／秘密、疾走、破壊、飽満の欲に飢え渇く」と、近代人の内面の奥深くに潜む原始性、野獣性を自然につらなるものとして、積極的に肯定した詩句がある。この「破壊性と残忍性と異常な肉体の欲望」を「貴い人間性」と呼ぶのは、それらが、自然によって与えられたものだからである。「貴い人間性」は、個に徹した時に認識できるのである。「そして一人にせめよ」の「せめよ」は、初出では「攻めよ」。「哀れなこの群集と群集との無益な争闘に対して／自然のいのちを思ふ事の無意味を知れ」は、この争闘は、「いのちある事実にならない事実」であるから、そこに「破壊性」や「残忍性」が見られても、そこに「自然のいのち」の表れを見ることはできない、ということ。「汝等は道路にしかれる砂利の集団だ」は、お前たちは人々の足の下に踏みしだかれる存在にすぎない、という意味。初出では「しかれる」は「敷かれる」。「汝等は偶然に生き、偶然に死に」は、その存在に必然性がない。単に生存しているにすぎない、ということ。「張合に生き、張合に死に／又気質に生き、気質に死ぬ」は、明治四十三年十二月作の「根付の国」にうたわれた、「命のやすい／見栄坊な／小さく固まつて納まり返

つた」という日本人像を連想させる。その時々に見栄を張り、意地を張り、もっともらしく生涯を送る。そこには、自分の命の真実のかけらもない。初出では「張合」は「張合ひ」、「気質」には「かたぎ」とルビ。さらに、初出では、続いて、「汝等は豆絞りを制服の肩にかける徒だ／汝等は意気の為に命を投げ出すの徒だ／汝等は漣を見て大河の本流を知らない徒だ」の三行がある。「豆絞り」は豆粒ほどの小さな円を並べてあらわした絞り染め。「豆絞りを……肩にかけた」というので、手ぬぐいであろう。「制服の肩」とあるので、この一行は警官たちをさすとも考えられる。「徒」は仲間。この場合は、否定的な意味を含む。つまり、この行は、制服を着ていても、豆絞りの手ぬぐいを肩にかけて意気がる、軽薄な仲間にすぎない、ということであろう。「意気の為に命を投げ出す」は、前出の「根付の国」の「命のやすい／見栄坊な」と重なる。この行は、群集の側であろう。「漣」は小波。細かい波。表面の小さな動きを意味する。「大河の本流」は時代の大きな流れであろう。この行は、両者の全体に対して、言っているのであろう。この三行は、「張合に生き……気質に死ぬ」の内容をより具体的に述べたものであるが、作品としては、ややくどい感じがする。

「さめよ／一人にめざめよ／一人の力を貴び／一人の意味をしのべ」は、主題の再提示である。「汝等の焦心に何の値があらう／汝等の告白に何の意味があらう」というのは、「焦心」（悩みや苛立ち）も「告白」も「一人」に発したものではないからである。初出では「値」は「値ひ」。「ああ、群集よ／夜の群集よ／又思想および芸術にかかる群集よ」の「夜の群集」は、倒閣国民大会の騒乱に集まった群集。「思想および芸術にかかる」の「かかる」は関係する。以上の二つの群集を、それはさし当たって、光太郎の気にかかるものであるが、それを「群集を生命とする群集」と、群集一般の問題に話を進めるのである。「空しき汝等一人の声」は、群集の一人である間は、真に「一人」ではありえないからである。「きつかけに生き、提言に生きる事を止めよ」は必然の生を生きよ、ということ。「きつかけ」は、ふとしたきっかけ、はずみの意味。「提言」は、考えや意見を出すこと、また、その出した考えや意見のことであるが、ここでは、ふとした思いつきの意味であろう。「偶像の中にもぐり込む事を止めよ」は、伝統的または絶対的な権威とされるものの中に個を消滅させることを止めよ、の意味。群集の「偶像」は正義であり、警察側の偶像は政府の権威である。「しらじらしい汝等の虚言をやめよ」の「虚言」は人をあざむく言葉。うそ。ここでは、自己の真実から発していない言葉。「群集によつて押される浮動の潮流を蔑ろにせよ」の「エフエメエル」はéphémère（フランス）。「浮動の潮流」はたよりなく揺れつづける、その時々の世の中の流れ。「一人の実体にしみ通り／一人の根を深め／一人の地下泉を掘り出せよ／こんこんとして湧き上る生水を汲めよ」の「一人」は、一人一人が、自分自身のということである。「根を深め」の「根」は、大正二年三月作の「人類の泉」の「私の正しさは草木の正しさです」以来の、光太郎の、自分の生を自然の律に従うものとしての「草木」のイメージである。「地下泉」は「根」のイメージと直接関わりあいながら、生命の根源を意味する。そして、「生水」、つまり湧き水は、生命の象徴である。そうすることによって、「偶然はあとをたち／思ひつきは価値を失」って、必然の支配する世界が現れ（「たち」は初出では「絶ち」）、「其処にこそ自然に根ざした人間はまろく立ち現はれるのだ」。直前の、「実体にしみ通り」「根を深め」「地下泉を掘り出」し、「湧き上がる生水を汲」むことは、すなわち、「自然に根ざし」て生きることである。「自然に根ざした人間」については、大正二年十二月作の「冬の詩」に、「自然を忘れるな、自然をたのめ」という句がある。「まろく立ち現れるのだ」については、すでに、この詩の中に、「あのまんまろな月を見よ」という句があった。「まろく」は全的に、充実して、の意味であろう。

「一人の力を尊び／一人の意味をしのべ」と繰り返して、詩は終息部に入る。「むらがりわめき、又無知の声をあげるかの人人よ」も、冒頭部の繰り返し。「寒い風に凍てて光るあの大きな月を見よ／月は公園の

黒い木立と相摩して光る／まんまろに皎然と光る」の「相摩して」の「摩す」はこする、みがく。風にゆれる葉を落した冬木立が、月を研いでいるように見えるのである。「皎然と」は白く明るく輝くようす。この「月」は、大正元年八月あるいは九月作の「おそれ」の「世界を夢に導き、刹那を永遠に置きかへようとする月」のイメージ、すなわち、永遠性を蔵しているとともに、冬の月であることによって、自然の厳しく、しかも美しい姿を示していると考えられる。初出では、「凍てて」は「凍（い）てて」とルビ。終りの二行は、「月は公園の黒い木立と相摩して／光る、まんまろに皎然と光る」と、光太郎自身の心が、すでに群集の騒乱を離れて、一人静かに、冷徹な月の光と対話しているように結ばれている。

以上のように、この詩は、群集であることを生命とする群集に対して、群集であることの空しさを説き、「一人の力を尊び／一人の意味をしのべ」と「一人」（個我）の確立を呼びかけたものである。この群集の行動は、初めに記したように、海軍上層部の収賄事件に発したものであるが、この行動の背後には、政党間の争いも透けて見えていた。光太郎が、それをどのように見ていたかは明らかではないが、詩中に、光太郎の帰国直後の「根付の国」の内容と重なる部分があることからも明らかなように、この光太郎の主張は、光太郎の長年の思いによるものである。

婚姻の栄誦

ほめよ、たたへよ
婚姻のよろこびをうたへよ
新郎（はなむこ）と新婦（はなよめ）と
手をとりて立てり
さかんなるかな
新しきいのちは今創められんとす
しかしてまた
新しき征服の歩みは今祝（ことほ）がれたり

ほめよ、たたへよ
婚姻のよろこびをうたへよ
新郎（はなむこ）は力に満てり
新郎はよろこびにかがやけり
新郎はあらゆる可能を其の手に握れり
新郎よ、新郎よ
汝のよろこびを極め
汝の力を飽く事なく注ぎつくせよ
与へられたるすべての欲望に
汝自身を信頼せよ
又永遠の理法と永遠の情念とに
汝自身を研ぎひからせよ
新郎は雄雄し
新郎はたのむ可きかな

ほめよ、たたへよ
婚姻のよろこびをうたへよ
新婦（はなよめ）は愛に満てり
新婦はさいはひにわななけり
新婦はありとある美しさをその胸に蔵（かく）せり
新婦よ、新婦よ
汝のさいはひの一しづくをも余す事なく味へよ

汝の愛を日に新しくめざましめよ
汝の使命をおもひわづらひて
汝の本能に軛(くびき)をかくるなかれ
ただかがやけよ
汝の生来を堀(ママ)り深め
汝の深因に汝の喜怒哀楽を裏づけよ
汝は大地より湧けり
汝は何ものをも包む大地の底力を体現せよ
新婦はらふたし
新婦は愛す可きかな

ほめよ、たたへよ
婚姻のよろこびをうたへよ

新郎と新婦と手をとりて立てり
汝等は愛に燃え、情欲に燃え
絶大の自然と共に猛進せよ
滅却は罪悪なり、恥辱なり
ただ増大せよ、真の瞬刻のいのちを惜しめよ

ほめよ、たたへよ
婚姻のよろこびをうたへよ

（三月六日）

「文章世界」大正三年四月号に発表。初出では全漢字にルビ。

「栄誦」の「栄」は栄えること。華やかなこと。「誦」は声を出して唱えること。「婚姻の栄誦」は、結婚をほめたたえ、その喜びをうたう、というほどの意味。

「ほめよ、たたへよ／婚姻のよろこびをうたへよ」は全四連の各連の前後に配置され、主題を提示するとともに、快適なリズムを醸成している。

第一連は、「新郎と新婦」の活力のあるようすを、「さかんなるかな」とほめたたえ、「婚姻」の意義を、「新しきいのち」の創造ととらえ、この「婚姻」が、「新しき征服の歩み」の出発であることをうたったもの。光太郎の現実に即して見れば、智恵子を得ることは、新しい「いのち」を得ることであった。大正二年の九月、上高地に滞在している光太郎のもとに智恵子が訪れ、同宿するが、この時、二人は婚約したと、光太郎は「智恵子の半生」に述べている。『道程』において、この時の体験を背景にした「山」の次に置かれている「よろこびを告ぐ」には、「今まで見た事のない生が姿を現すだらう」と、新しい「いのち」の誕生が予告されている。今、光太郎は、智恵子とともに、「創世記」ならぬ「創生記」を生きようとしているのである。「新しき征服の歩み」の「征服」の意味を、『広辞苑』第五版の「征服」の項の1の「征伐して服従させること」と取れば、その対象は、三か月前に書かれた「僕等」に、「僕は丁度自然を信じ切る心安さで／僕等のいのちを信じてゐる／そして世間といふものを蹂躙してゐる／頑固な俗情に打ち勝つてゐる」とある「世間といふもの」「俗情」ということになるであろう。2の「転じて、困難なことをなしとげること」と取れば、今後の二人に予想される人生の道程ということになるであろう。光太郎の「俗情」「世間」に対する敵意には深いものがあるが、ここは後者を選んでおきたい。

第二連は、「新郎」に呼びかけたもの。「新郎は力に満てり」については、前述の「僕等」に、「僕が活力にみちてる様に」とある。また、今まで見てきたように、光太郎において、「生」イコール「力」、「力」イコール「生」である。「与へられたるすべての欲望に／汝自身を信頼せよ」は、「すべての欲望」は自然によって与えられたものであるからである。「永遠の理法と永遠の情念とに／汝自身を研ぎひからせよ」の「永遠の理法と永遠の情念」は、「自然の理法と自然の情念」と書き換

えることができる。「永遠の理法」は、「或る宵」（大正元年十月作）の「自然の定律」「必然の理法」にあたるものであるが、光太郎が絶対的存在とする自然の核にあたるもの、というより、説明のしようがない。「理法」に「情念」が並んだところが新しく、「自然」とあってよいところが「永遠」とあるところと合わせ考えると、「自然」の人格化が一歩進んだと考えることもできる。「新郎は雄雄し／新郎はたのむ可きかな」は、次連の末尾「新婦はらふたし／新婦は愛す可きかな」と対応し、新郎は信頼するに足る、一身を託すに足る、と保証しながら、新郎と新婦の意味づけが行われている。前出の「僕等」には、「あなたは僕をたのみ／あなたは僕に生きる」とあった。「新婦」は「新郎」をたのみにする、という形である。

第三連は、「新婦」に呼びかけたもの。「新婦は愛に満てり／新婦はさいはひにわななけり」は、第二連の「新郎」の姿と対の表現になっている。「新郎」の「力」と「よろこび」に対して、「新婦」の「愛」と「さいはひ」である。以下も、同様である。「新郎」のいだく「可能」性、「新婦」の「美しさ」。「新郎」の「よろこび」と「力」に対して、「新婦」の「さいはひ」と「愛」。「汝の使命をおもひわづらひて」の「汝」の内容は「新婦」であるが、「新婦」の「使命」については、何も語られていない。自分は何をしたらよいのかと思いなやんで、の意味か。古い家族制度における妻の立場を意味するのであろう。「汝の本能に軛をかくるなかれ」の「軛」は車の轅の端につけて、牛馬の後頚にかける横木。牛馬の動きを制約する道具。「軛をかける」は制約するの意味。この二行は、本能の命ずるままに、自然に生きよ、ということ。そして、「ただかがやけよ」というのである。次の四行は、「新郎」は、「永遠の理法と永遠の情念とに／汝自身を研ぎひからせよ」、つまり、自然に従って生き、自己を磨け、とあるのに対応するものである。「汝の生来を堀り深め」の「生来」は天性、「汝の深因に汝の喜怒哀楽を裏づけよ」は、「汝の喜怒哀楽」、つまり感情が働くときには、深い、心底からの裏づけに従って働くようにせよ、という意味。「汝は大地より湧けり」の「大地」は、「牛」（大正二年十二月作）でも、牛は大地とともにあるもの、としてとらえられている。「大地」は、理念的、抽象的な「自然」の具体的な表れの一つと考えられる。万物を生み育てるものである。『旧約聖書』の、エホバ神が「土の塵」よりアダムを造り、アダムの肋骨からイヴを成したという、人類のもとを土に見る見方も影響しているだろうか。いずれにしろ、「大地より湧」いたのだから、「何ものをも包む大地の底力を体現せよ」ということになる。「包む」は包容する。「体現」は、具体的なかたちに現すこと。「新婦はらふたし」の「らふたし」は、可愛い、可憐である。

第四連。「新郎と新婦と手をとりて立てり／汝等は愛に燃え、情欲に燃え／絶大の自然と共に猛進せよ」の「情欲」は、先に見た「愛の嘆美」において、すでに全肯定されている。「絶大」はこの上なく大きいこと。「滅却は罪悪なり、恥辱なり／ただ増大せよ、真に瞬刻のいのちを惜しめよ」の「滅却」は滅びること、「増大」は増えて大きくなること、「瞬刻」はまたたくま、瞬間。「いのち」のほろびることは、罪悪であり、恥辱であると知り、真に瞬間の「いのち」を惜しみ、「いのち」を増大させよ、というのである。

以上のように、この詩は、「婚姻」をほめたたえ、そのよろこびをうたったものであるが、「婚姻」を新しき「いのち」の創造ととらえ、情欲を「自然」によって与えられたものとして肯定し、「新郎」は自然とともに生き、自然に磨かれ、「新婦」はすべてを抱容する大地の底力を体現するべく勤め、共に、瞬間の「いのち」を惜しんで、成長せよ、という内容は、正しく、光太郎自身の決意と喜びとともに、智恵子に、二人の結婚のありうべき姿をつげたもの、といえる。

万物と共に踊る

彼は万物を見る

また万物を所有する
重いものをもち又軽いものをもつ
明るいものを見また暗いものを見る
人のいふ矛盾が矛盾にならない
砂糖の中へ塩を入れる
燃える火から水を取る
あらゆる対立は一つに溶ける
あらゆる差別は一つに輝く
相剋と戦闘と
排擠と鍛練との
身を切る苦しさに七転する時も
彼は其を成し遂げる必勝の気魄を持つ
最も忠実であつてしかも背叛する
最も真摯であつてしかも悪謔する
最も激烈な近代人であつて
しかも最も執拗な古代人である
最も精霊的であつて
しかも最も肉体的である
女と共に泣き
女と共に踊る
女を憎み
女を愛する
愛憎を超えた永遠を知る
その一源をつねに掌中に握る
それゆえ
女の信頼し得る最も堅固な胸である
純一であつて単調でない
複雑であつて乱多でない
つねに死身(しにみ)で
しかもつねに笑つてゐる
貞潔であつて又多情である
自由を極めてしかも或る規律がある
そしてあらゆる凡俗と妥協とを絶してゐる
万物は彼に押しよせ
彼は万物と共に乱舞する
天然の素と交通し
天然の実を実とする
すべての瑣事はみな一大事となり
又組織となる
彼は自らに信憑し
自らの渇欲に羅針を据ゑる
彼にとつて
生長は生長の意識でなくて
渇欲の感覚である
そして遂行の喜悦である
そして又剰残の不満である
現状の不安である
あらゆる刺戟は彼の空虚をめざめしめ
あらゆる養ひは彼の細胞にひびき渡る
幺微に入り
不可思議にせまる
彼は万物と共に踊り
彼は万物を見
また万物を所有する
彼は絶えず悩み、絶えずのり越す
――偉大の生れる時だ

（三月九日）

「万物と共に踊る」は、「女子文壇」大正三年四月号に発表された。

「彼は万物を見る／また万物を所有する」の「彼」は、光太郎自身を客観化した表現とも取れるが、ここは光太郎の求める理想的人間像であろう。「重いものをもち又軽いものをもつ」は「万物を所有する」の一具体例を示したもの。「もつ」は「所有する」こと。「明るいものを見また暗いものを見る」は「万物を見る」の一具体例。「万物」を「重いもの」「軽いもの」、「明るいもの」「暗いもの」という対立する存在を組み合わせることによって表現している。その結果、つまり、「万物を見」、「万物を所有する」結果、「人のいふ矛盾が矛盾にならない」のである。「砂糖の中へ塩を入れる／燃える火から水を取る」は、「砂糖」と「塩」、「燃える火」と「水」という対照的なものを組み合わせている。「重いもの」「軽いもの」、「明るいもの」「暗いもの」を組み合わせた句法と同じである。この二行は、「あらゆる対立は一つに溶ける／あらゆる差別は一つに輝く」とまとめられる。この二行を角田敏郎氏は、「相対的な境界を突破して、絶対の世界に遊ぶ心境」と読み、『無門関』を通して光太郎の体得した「禅的機制の投影」と見ている（「高村光太郎と『禅宗無門関』」、「言語と文芸」昭和39・5）。「差別」については、「愛の嘆美」に、「あらゆる差別は一音にめぐり／毒薬と甘露とはその筐を同じくし」とあった。結局、冒頭の「彼は万物を見／また万物を所有する」という二行は、この「絶対の世界」を所有する、というところに落ち着くと見てよいであろう。

「相剋と戦闘と／排擠と鍛錬との／身を切る苦しさに七転する時も」の「相剋」は互いに勝とうとして相争うこと。「排擠」は人をおしのけ陥れること。排斥すること。「七転」は「七転八倒」の略。ころげまわって苦しみもだえること。この「相剋と戦闘」「排擠と鍛練」には対象となる語がない。が、「身を切る苦しさに七転する時も」と続くので、「身を切る」ことと関わりがあるとすると、その対象は自分自身ということになる。大正元年十二月作の「戦闘」は、真に自分自身であることを欲して、外部に組み込まれてしまっている自分を取り戻し、自己の内面にある敵を排除しようとする決意をうたったものであるが、「身を切る苦しさに七転する」という表現は、この「戦闘」という詩を思わせる。「彼は万物を所有する」一方、内部には、まだ矛盾を抱えている、というのだろうか。「最も忠実であつてしかも背叛する／最も真摯であつてしかも悪謔する」は、自己に対しての矛盾した行為の表現である。「背叛」はそむくこと。謀反を起こすこと。「真摯」はまじめなこと。「悪謔」は悪ふざけをすること。「最も激烈な近代人であつて／しかも最も執拗な古代人である」「最も精霊的であつて／しかも最も肉体的である」は自己の矛盾した内面、あるいは本質の表現である。「精霊的」は「肉体的」に対立するもので、天上的なものという響きがある。このような、行為における矛盾、内面における矛盾を内蔵することは、「万物を所有する」ことの証明でもあろう。

「女と共に泣き／女と共に踊る／女を憎み／女を愛する」という矛盾を内包した表現は、「女」との一体感を表わす。「彼」は「愛憎を超えた永遠を知る／その一源をつねに掌中に握る」の「愛憎を超えた永遠」は、今、言葉を置き換え難い。「一源」は「根源」と同じに考えてよいであろうか。「それゆゑ／女の信頼し得る最も堅固な胸である」の「堅固な」は、たしかな、しっかりしたの意味。「純一であつて単調でない／複雑であつて乱多ではない」以下は「彼」の「内面」の在り方である。「乱多」は「乱雑」の意味か。「つねに死身で／しかもつねに笑つてゐる」の「死身」は、決死の覚悟でいること。捨て身。「貞潔であつて又多情である／自由を極めてしかも或る規律がある」と、生き方においても、とらわれるところがない。「或る規律」は、「或る宵」にいう「自然の定律」「必然の理法」、「婚姻の栄誦」にいう「永遠の理法」のごときものであろう。これらは、自然に従っているかぎり、誤ることはないのである。「そしてあらゆる凡俗と妥協とを絶してゐる」——「凡俗と妥協」の否定、これを最も明確に語ったのは大正元年十月作の「或る宵」であるが、この思いはそれ以前も、それ以後も、光太郎の心を決して離れることのないものとして、善きにつけ悪しきにつけ、光

太郎の思考や行動に関わり続けて来たものである。この一行は、対立や矛盾を含む表現の形を取っていない。

「万物は彼に押しよせ／彼は万物と共に乱舞する」――この詩の冒頭には、「彼は万物を見る／彼は万物を所有する」とあり、「彼」と「万物」との関係は静的なものとして表現されている。だが、ここでは、両者の関係は動的なものとして表現され、「彼」と「万物」との関係は、より密接なものとなっている。「乱舞する」は入り乱れて踊り狂うこと。「天然の素と交通し／天然の実を実とする」の「天然」については「愛の嘆美」の項で簡単に触れたが、光太郎の意識においては、「天然」は「自然」の上位概念としてあった、と考えられる。「天然の素」は自然の本質、その構成要素。「交通し」は行き来し。「天然の実」は自然の内容やまこと。「すべての瑣事はみな一大事となり／又組織となる」の「瑣事」は些細なこと。「彼」にとって、些細なこと、というものはなく、些細に見えることも、すべて組織化され、有機的な働きをする一体となる、という意味。「彼は自らに信憑し／自らの渇欲に羅針を据ゑる」の「信憑」は信頼。「渇欲」はあるものを得たいと強く望む気持ち。「自らの渇欲に羅針を据ゑる」は、自らの欲望に従って、自らの進路を定める、つまり、行為を決定するという意味。「彼にとつて／生長は生長の意識でなくて／渇欲の感覚である」以下は、「彼」にとって「生長」をうながすものは、強い欲望であり、ものごとを成し遂げた喜びであり、また、余り残りの不満であり、「現状の不安」である、ということである。「あらゆる刺戟は彼の空虚をめざめしめ」、「生長」をうながし、「あらゆる養ひは彼の細胞にひびき渡」り、「生長」をうながす。「幺微に入り／不可思議にせまる」の「幺微」は小さいこと、細かいことである。この二句についても対象が明示されていないが、自然と考えてよいであろう。

「彼は万物と共に踊り／彼は万物を見／また万物を所有する」は、「彼」の性状、特質、さらには本質の再確認である。その「彼は絶えず悩み」、その悩みを「絶えずのり越」え、生長する。まさに、「偉大の生れる時だ」というのである。光太郎は、大正二年十二月作の、「よろこびを告ぐ」において、パーナード・リーチに「まことの人」「いさましく新しき力」の誕生を告げている。この「偉大」、つまり、偉大ないのちは、その「まことの人」の具体的な内容が、光太郎の内部において確立したことを示している、と見てよいであろう。それは、矛盾、対立、差別などの一切を包み込み、「絶対の世界に遊ぶ心境」（角田敏郎、前出）である。とはいうものの、光太郎は、まだ世俗、凡俗を意識しないではいられないのは、見たとおりである。